

# 昔を偲んで

伏見 弘

野方二丁目

昭和十三年春、小生は、早稲田大学理工学部採鉱冶金科を卒業し、三菱金属鉱業に入社。北海道手稲鉱業所選鉱勤務となり、札幌に居を構えた。日曜日ごとに札幌市内やその周辺を遊び回ったが、時には小樽へも足をのぼしたりした。また、丁度この季節には、銭函でサンマ漁が盛んに行われており、そこまでよくサンマを買いに行ったものである。当時は、主食が不自由であったことからのことと思う。

同年秋、徴兵検査を受けて甲種合格となり、翌年一月、各務原第一航空教育隊に入営して一期の訓練を受けることとなった。初年兵として、噂にあるようなきつい訓練を受けたことも忘れられない。

幸い、一期訓練が終わって、五月には技術幹部候補生（航空技術）に選拔され、所沢整備学校に進んだ。そこで、高圧水添等の試験を大宮の三菱研究所で行うなど、燃料技術に関する勉強をしたり、所沢から立川の航空技術研究所へと通って勉強したりと、約一年間大学時代と同じような感覚の生活をした。こ

の期間の仲間達とは、航技会という会を作って、今も楽しくつきあっている。

昭和十五年五月、所沢整備学校を卒業して、小石川にある陸軍燃料廠の研究所に配属され、岩国の和木の製造所付けとして製造所建設計画の手伝いに従事した。昭和十六年の太平洋戦争開戦当時は、既に将校に任官しており、岩国で任務多忙な日々を過ごしていた。その中でも任務の暇をみつけては、近くの錦帯橋や宮島、広島などに遊びにでかけた。翌年の春、満州の錦西製造所に配属となり、渡満した。山海関、奉天、新京、ハルピン、胡蘆島と駆け回り、近くに興城という放射能温泉があった。四平の製造所にもよく出張した。

昭和十八年春には、本廠に呼び戻され、陸軍省付の石油連絡員として、南ホルネオのバリックパン駐在を命じられた。バリックパンにあった海軍製油所の潤滑油製造に関して、パレパンの陸軍製油所と海軍の潤滑油生産内容について連絡を取ったり、陸軍省整備部燃料課に甲号暗号で報告を毎月送ること

が任務であった。現地の勤務者は小生のほか、技師一名、雇員二名、現地使用人の男子三名、女子一名であった。また、現地に滞在していた、商社の駐在員や民政府職員の日本人の人達と親しくつきあっていたため、日本食には不自由しない生活であった。

バリックパパンは、南ボルネオの海岸に位置する温暖なところで、一〇二海軍燃料廠があった。ここから東海岸沿いに船で四、五時間行ったところにサマリンドがあり、一〇一海軍燃料廠が置かれていて、石油の採掘をしていた。更にそこからジャングルの中を車で三〇分ほど走ったところにロクアールがあって、無煙炭を採掘しており、度々視察に行った。

バリックパパンに、藤山一郎氏の一行が慰安に來られたことがあり、今にして思い出となっている。バリックパパンでは、昭和十九年夏頃から、豪州基地から飛びたつた米空軍B24による夜間の空襲を受けるようになった。製油装置やタンク等が被爆し爆発し、午後八時頃の夜空に花火のように輝かしく映つたのを記憶している。空襲のない晴れた夜には中天に北斗七星が鮮やかに眺められた。

昭和二〇年三月には、製油所やタンクが半壊して操業不能に陥り、当所での任務は達成することならずと認められる状況となった。また、日夜豪州方面からの空襲に攻められる状況となってきたため、引き上げることとした。

この時は、小生一人だけが駐在しているのみで、暗号書類を焼却し、海岸線沿いの椰子林の間を十日間歩き続けてバンジェルマンにたどり着いた。ここから駆潜艇に乗りジャワのスラバヤに行き、そこからジャカルタに出て、更に飛行機で昭南（シンガポールの日本名称）を経由して仏印（フランス領印度支那）現在のベトナム）のサイゴンに着いて内地行きの飛行機を待つこととなった。

既に技術大尉に昇進していたが、飛行機待ちをしている間の八月十五日に終戦となり、特設工兵隊に編入となって働くこととなった。翌二一年四月、空母「かつらぎ」に乗船して、大竹に帰還した。

約八年間命を長らえて無事奉公をおえたのであった。石油と共にの生活であった。教官や上官、同僚、部下にも恵まれていたと思う。数多くの調査報告を陸軍省に送ったのだが、いかに活用されていたのかは知る由もない。しかし、バリックパパンでの体験は、鑿井や精製技術等の勉強となり、昭和二三年春から昭和五九年春まで勤めた大学での講義、授業等にも役立った。昭和十八年春に結婚して、一男一女に恵まれた。今ではそれぞれ成長して幸福な生活を送っている。私も、まだまだ元気に活躍していきたいと思っている。